

胡蝶の君へ

九咲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蟲柱・胡蝶しのぶに惚れた転生者の話

目次

胡蝶の君へ【前編】	1
宵鷺の貴方へ【中編】	7
逢魔が時に胡蝶舞う【後編】	13
胡蝶より宵鷺の貴方へ【エピソード】	26
しのぶアフター①	31
しのぶアフター②	37
しのぶアフター③	43
しのぶアフター【幸せの願い】	53

胡蝶の君へ【前編】

これは蟲柱・胡蝶しのぶに恋した俺の足掻きの物語だ。

それは電撃で落雷のような恋だった。

鬼に襲われ虫の息の俺は雪の降る曇天の空を見上げていた。

痛え、寒い…。

真冬の寒気は容赦なく我が身を苛む。傷も徐々に体温をも奪う。

意識は朦朧で妹を抱えていた。妹はもう冷たい。

ああ、守れなくてごめんなど優しく髪を撫でる。生前もいつもとい

てあげていた綺麗な髪のままだった。

さらに俺たちを庇って死んでしまった姉に視線を向ける。

ああ、相変わらず人形のように美人だった二人の姿は変わらない。

もう、ほほえんではくれないけど。

寒空の中で死んでしまうのだろう。…鬼に食われなかっただけマ

シだろうか。妹と姉を喰わせなかっただけ個人的には勲章もんだ。

剣術ならつとくもんだ。

「もし、生きてますか？」

曇天を遮るように覗き込む顔があった。

小さく可憐であったが難しそうな顔をしていた。

あれ、可愛いな。

虫の息のままの外れなことを考えている。

姉さんと妹にどやされるな、ははっ。

「間に合わず申し訳ありません。貴方はまだ息があるようです…お姉さんと妹さんはお悔やみ申し上げます」

処置をしますという言葉と共に意識は暗転する。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

それから彼女は・胡蝶しのぶに保護された。

彼女の住まいとする蝶屋敷と呼ばれる屋敷に世話になっている。

「逢魔さん、大分良くなりましたね!!」

よく世話をしてくれる三人娘の一人なほちゃんが言ってくる。

「そだね。…大分良くなったね皆のおかげだ」

よいぎぎおうま
宵鷺逢魔。それが俺の名だ。

身長はそれなりにあるが、線が細いとよく言われる。

それでも宵鷺に伝わる剣術を習っていたため筋肉量はそれなりにあった。

そのおかげが分からないけれど軽く運動出来るまでは回復した。

癒えるはずの傷と癒えさせたくない病気を抱える事になるが

「逢魔くん、良くなりましたね…それで話とは?」

恩人である胡蝶しのぶさんが部屋に入ってくる。

傷が治るまで本当よくしてもらった。

家族を失った痛みと。

小さく可憐で作り笑いをする少女に恋したことに多少の罪悪感を覚えるけれど。

「鬼殺の剣士に…ですか?」

「はい、…出来れば貴女の指導で。貴女に救われた」

「…うーん。私は育手ではありませんし。逢魔くんが何の呼吸に即しているかは分かりませんし…まあ鬼殺隊は年中人手不足ですし歓迎はしますよ」

「けれど拾った命。捨ててはいけませんよ逢魔くん」

「はい、…全てしのぶさんのために。この身の全てはしのぶさんの為
に」

真剣な眼差しでしのぶさんを見つめる。
彼女を目の前にしてこの気持ちは抑えがたい。

「…え、えっと」

さすがの、しのぶさんも言い淀み視線が踊る。

きやーきやーつと、後ろで騒ぎ立てる三人娘と首をかしげるカナヲ
がいたが俺はしのぶさんの手を握る。

「…き、傷が完治してからですよ逢魔くん」

顔を赤くしてそっぽ向くしのぶさん、まじ天使。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

傷が完全に癒え激しい運動も問題なかったためしのぶさんに許可
を得て育手の元を訪ねる。

守衛螺映しゅえらうつえという妙齢の女性だった

着物を着崩し腕に大きな傷のある白髪の女性。

「……………誰かと思えば宵鷺のぼうずか」

「…やっぱり映さんでしたか。……………鬼殺隊だったんですね」

かつて宵鷺剣術道場で師範代を務めていた女性。

父よりも強く何をしているかは分からず父が逝去してから疎遠に
なってしまうていたから何をしているかは知らなかった。

「……………かか、夜明嬢よあけと夜深嬢やみもしんでもうたか…弔い合戦か敵討
ちか？逢魔」

「それもありますか…救って貰った恩人の力になりたいくて」

「胡蝶の娘にでも惚れたかえ？」

意地の悪い笑みを浮かべるが。

「はっ」

と真つ直ぐと、答えると映さんは目を丸くする。

「まじか。あの堅物の坊主がの。さぞ夜深嬢が悔しがるか」

「なんで夜深が出てくるんです？」

首を傾げる…振りをする。あの子が俺に家族以上の慕情を抱いていた事は察していた。

「鈍感め。……胡蝶の娘を助けるか。柱レベルになればあかんぞえ？」

分かっている。分かりすぎている。

「宵鷺逢魔は『転生者』だ。

この世界を知っていた。この世界に生まれ自我が確立したと同時に自覚していた。

この世界は『鬼滅の刃』という漫画の世界だ。

刊行15巻の現在連載中の漫画だ。

推しのキャラは実はしのぶさんではなかった。

けれど彼女に救われ彼女を目の前で間近でみて惚れてしまった。

まだらの記憶は知識として残っている。

もはや自我は生前の自分を失い『宵鷺逢魔』と確立しつついる。

『宵鷺夜明』と『宵鷺夜深』を失った痛みも俺のものだ。

だから再び失いたくないのだ。

確定された未来。上弦の鬼に敗死する彼女の未来をねじ曲げるの

だ。

「……………俺には殺さなきゃいけない鬼もいるんです」

「選抜まで鍛えてやるぞえ、儂の扱きはキツイぞ。まあ下地があるのはよることじゃ」

嗜虐的な笑みを浮かべる映さん。道場時代からそう変わらない。

「……………変わらないですね映さんは」

呼吸。鬼殺隊の誰しもがそれを会得している

肺を強くし全身に巡る血液を多くする『全集中の呼吸』。
鬼を殺すのは人の身で至らなければならぬ。
怪我もするし病気にもなる。
身体は鍛えて鍛え抜いた先に強さがあるのだ。

俺は下地があつたから体力作りは勘を取り戻す程度にあつた。
全集中の呼吸に関しても『宵鷺』の剣術の教えに通ずるところも有り会得していたものがあつた。

「夜明嬢も夜深嬢も喰われずにいたのも主が抵抗したのだろう。鬼殺の剣士として向いてるのやもな」

なら守れなかつたのは俺に訓練が足りなかつたからだ。

もつと真面目に訓練していれば二人とも死なずに済んだのかもしれない。

半年後。

最終選抜へいたる。

俺が習得したのは『影の呼吸』。

『宵鷺』の剣は正道に非ず。奇襲や隙をついた正々堂々とは言えない剣ではあつた。

影から主を護る忍びに似て非なるものだった。

宵の鷺のような剣術『宵鷺剣術』の根源であつた。

「いってききますよ。映さん」

「惚れた女のために力を使え逢魔。あまり私怨には駆られるなよ。死んだ二人ともそれは望んではいまい」

「……それでも責任は取らせませぬ。」

『十二鬼月』上弦の式『童磨』を殺す。

俺の家族を殺した鬼を。

俺の愛した女性をこれから殺す鬼を。

滅する為に。

宵鷺の貴方へ【中編】

不思議な人でした。

影のある人でした。

線が細い人でしたが中性的ではなく男性らしい人ではありました。彼からの直球な好意を上手く流せませんでした。

心拍数が上がり呼吸も乱れます。

私の知らない感情でした。

両親を鬼に殺され姉と鬼殺に生きてきてその姉をも殺されそういった事を考えてきたことはありませんでした。

そういった事をしている場合ではないと断じて来たのかも知れない。

「しのぶちゃんそれは恋だよっ」

私以外の唯一の女性の柱である甘露寺蜜璃に対してその感情を吐露する。

継子のカナヲも論外だし三人娘は幼すぎるしアオイも違うだろう。仮にも『恋』柱である彼女位にしか相談出来なかった。

まあ他の柱達はあらゆる意味で論外ですけど。

かく言う彼女も特定の誰かと付き合っているとは聞いた事は無いが。ま、蛇柱の彼がいる限り厳しそうですけど。

「はあ、恋です…か」

「良いなあ、情熱的だなあドラマチックだなあ」

いや、相談したのは失敗だったのかも。

…再確認的な意味合いではよかったのかもしれない。

彼の直接的な好意を断る術と理由はなかったのかもしれない。

「別に鬼殺の剣士が恋しちや駄目って理由はないと思うよ？」

蜜璃さんは、めずらしく真剣な眼差しで此方を見る。

「しかし…生死が隣り合わせですし」

「宇髓さんなんてお嫁さん三人いるし」

いやあれは特殊過ぎるのでは。

「宵鷺くん…だっけ？鬼殺の剣士だししのぶちゃんの意向も十分汲んでくれそうじゃない？ぞっこんなんですよ」

いやぞっこんって。

頬が熱くなる。心拍数が上がる。

「…姉さんがなんていうか」

姉を理由にだすのは卑怯かも知れない。

「それこそしのぶちゃんに幸せになって欲しいんじや無いかな」
言葉を失う。

「じゃないかなあって私は思うなあ」

幸せ…か。

今まで考えてこなかった事をぼんやりと考える。

すっかり冷めてしまったお汁粉を、一口啜る。…あまい。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

俺こと宵鷺逢魔が鬼殺の剣士になって早一年が経過した。

階級は甲。柱以外の最上級の階級へ至る。

最速で柱になった時透無一郎に及ばないもの他の剣士に比べ抜きん出ていたらしい。

殺した鬼はゆうに百。柱になる条件は十二鬼月を殺すか鬼を50体殺すとされているが彼は甲の階級へ収まっていた。

蝶屋敷を拠点とし鬼殺に励んでいた。

「しのぶさんの元で働けないのであればお断りします」

呆気らかんと言いつつそう。

隣に居た胡蝶しのぶさんは顔を真っ赤にしている。

リア充爆発しろと隠の人は思いましたまる。

蝶屋敷にて、力仕事をこなしながらしのぶさんの仕事の手伝いをしていた。

「……………それに俺は『上弦の弐』の鬼を探し出すに集中したいです
し」ふと呟く。

『上弦の弐』……?」

「……………家族を、殺した鬼を思い出したんです」

まばらな記憶は不愉快な姿を覚えている。

にやけ面が癩に障る鬼だった。

男の鬼だった。

鬼にしては外見は整ってはいたがやはり鬼。

瞳には上弦と弐と刻まれていた。

ああ、十二鬼月……圧倒的強者と対峙してしまったと知る。

「……………けれど貴方はお姉さんと妹さんを守り切ったのでしょう
?」

「死なせてしまったからそれは違えますよ」

蝶屋敷の庭に出て花壇に水を撒く。

「あれは遊ぶ鬼です。遊び殺し喰らう鬼ですよ逢魔くん。…………それを

喰らわせず撃退出来たのであれば誇って良いはずですよ」

しのぶさんは優しくいい聞かせるように言ってくれた。

分かっているけれど。

「姉さん達の尊厳を守れた事は嬉しいですがやはり俺の人生から奪わ
れたのは事実なんだ」

縁側にちよこんと、座るしのぶさんへ振り返る。

「……………そうですね。気休めでした」

しのぶさんは、目を閉じる。

「いえありがとうございますしのぶさん。……………だからこそ俺は貴
女には死んで欲しくないのです」

「私は死にませんよだって…………」

「…………姉を殺した鬼を殺すまでは…………ですか?」

「…………はい。知ってましたか」

私はいくらとりつくつても……姉を殺した鬼が憎い。

「俺も貴女がこの前言ったた竈門君達に会いましたよ」

「すれ違いだったとばかり」

風変わりな鬼殺の剣士の兄と鬼の妹。

この前の柱合会議で話題になった。

「……………皆、あななれば良いのですけれど。だからこそ彼にこの願いを託してみては？・彼ならやってくれる」

「そうですね…そうかもしれない。あの兄妹は眩しいくらい純粹ですから」

逢魔くんは隣に座ってくる。

「ただ、心拍数が上がり頬が熱くなる。貴方と会ってから幾許はなるか。」

未だ慣れない。

「肩の力を多少抜かれてもいいんじゃないかな？しのぶさん。俺は貴女の全てに惹かれた。……仇が一緒なら分け合えると思う」

優しい声音。お館様とは別種の私の私だけを落ち着かせてくれる声。

「俺はけして貴女を殺させない。……そろそろ答えを聞かせて欲しい」

度重なるアプローチを受けていた。忙しさにかまけて正式に返事はしていなかった。

いい加減彼に失礼だし…誤魔化すのも限界だった。

貴方の優しさも真っ直ぐさも顔も声も匂いも全て……………私を惑わす。逢魔くん、私は……………胡蝶しのぶは…貴方を……………」

ああ、多分顔は真っ赤だろう。

「貴方が、大好きなんです」

「俺も好きだ、…しのぶ」

どちらからも手を重ねる。それだけで心拍数はまだ上がる。身体が熱いし思考はなんだか考えて居られない。

彼の事だけしか考えられない。

ああ。……みんな留守でよかったなんて……考える。

唇を重ねる。

……私は幸せになっていいのかな、姉さん。

逢魔が時に胡蝶舞う【後編】

宵鷺逢魔をどう思いますか？

「うむ、中々いい若手じゃないか!!柱候補で期待できるな!!」

「しのぶちゃんの彼氏でしょくキョンキョンしちゃうわあ。しのぶちゃんってば乙女の顔だもの〜」

「派手さが足りないぞ派手さがな!!けどやる男みたいだな」

「……若手が育つことは良いことだ」

「……………」

「甘露寺に手を出したら殺す」

「……………」

「…ぽけー」

柱合会議。しのぶのおつきとして馳せ参じた次第ではあるが

濃いなあ。柱メンバー

うえから『炎柱』煉獄杏寿郎、『恋柱』甘露寺蜜璃『音柱』宇髄天元

『岩柱』悲鳴嶼行冥『水柱』富岡義勇

『蛇柱』伊黒小芭内『風柱』不死川実弥『霞柱』時透無一郎

以下敬称略だ

個性的で濃すぎるメンツだ

「……………」

あー、視線を感じる

基本柱合会議に継子などの連れを連れて参加はしない

「胡蝶。彼氏随伴とは良い身分だな」

伊黒小芭内が口火を切る。しのぶ曰く蛇のような男らしい

「やめろやめろ伊黒。モテない男の僻みに見えるぞ派手にな!!」

「うるさい宇髓。嫁が三人居るからと調子乗るなよ」

「俺はイケメンだから仕方ないだろ！派手だしな!!」

「色恋沙汰は難しいな！なあ富岡!!」

「……………何故に俺に振る？煉獄」

「くっだらね」

「あらあら、宇髓さんはともかく男子力の足りない会話ですnee。ねえ逢魔くん」

ニコニコと笑いながら俺にふらんでくださいしのぶ。いや可愛いけどね!!柱を敵に回したくはないよね!!

「いちいち目鯨立てるなんて男の度量が問われると思いませんか？宇髓さん」

「そうだな、派手にな!」

派手にしか言っていないよこの人!!

「そもそもコイツがいるのがおかしいって話だろがよ!!」

あ、不死川さんキレた

「私と呼んだ。いけなかったかな?」

柱の皆さんが姿勢を整える

「お館様に致しましてはご機嫌麗しゅう…この宵鷺めはお館様が招いたと?」

不死川さんが、尋ねる

俺もしのぶの隣で頭を垂れる

俺も、初めてお会いする。鬼殺隊のまとめ役

お館様…産屋敷耀哉様

「柱について活躍してる子に一目見ときたいと思うのは変かな?」

「いえ、出過ぎた真似を…申し訳ありません」

「構わないよ、実弥…さて、逢魔だったかな?」

「はい」

「君は…何のために戦うのかな?」

「全ては我が恩人で恋人蟲柱・胡蝶しのぶの為に。そして上弦の弐の

鬼を殺すため」

そこは、迷わず揺るがず。けして曲がらぬ『俺の柱』だ

「…そうか。しのぶ、君は恵まれたね」

お館様は薄く笑う

「はい」

「それに君たちに恋愛などを禁じた事は無いよ。何より頑張ってくれている君たちが報われなきやおかしいって話だよ。私は常に君たちの幸せを願っているよ…それに守るものがあるという事が我々人間の強さだと思う」

お館様が、凄惨なる最期を遂げる事を知っている

まばらな記憶は覚えている

彼の死は我々に大いなる傷を残す。けれど彼の覚悟を否定して侮辱することは出来ない

彼の生き方、覚悟を曲げさせる理由を俺には持たない

素直に尊敬する

他の柱とは多少なりとも禍根はあるだろうが別に彼らに認められる為に戦うわけじゃない

しのぶの為と亡き夜明姉さんと夜深の為だ

それから光陰矢のごとし

竈門炭治郎を中心に物語は進んでいく

上弦の参・猗窩座アカカサとの邂逅

炎柱・煉獄杏寿郎の死を皮切りに進んでいく

音柱・宇髄天元を交えた遊郭での上弦の陸との死闘

刀匠の隠れ里の上弦の肆と伍の急襲

度重なる上弦との遭遇。流石は主人公

柱でさえ上弦の鬼との遭遇は稀。現柱達でさえ稀だ

そして竈門禰豆子の日光の克服。そして痣の出現が事態を加速さ

せていた

来たる決戦に向け柱稽古なる鬼殺隊の底上げが行われていた
痣の発現が急務とされていた

「しのぶ、貴女は柱稽古しなくていいのかい？」

敬語を使わなくなって久しい。彼女たつての希望だ

彼女の自室へ入る、恋仲になり何度か入っている

彼女の性格がよく分かりよく整頓されていた

薬学に詳しくは無いがそれに類する書物や器具が置かれていた

「カナヲが稽古付けてほしがってるみたいだけど」

「…あの子も自己表現出来るようになってよかったです」

「そだね、いい傾向じゃないかな炭治郎くんの影響かなあ」

不思議な少年だと思う。応援したくなるような少年だ

少なからずカナヲも影響されているよう

「ふふ、恋かもしれませんよ」

優しく笑うしのぶ、切迫は詰まってははいないようで何より

「…多分、決戦時にはあの鬼と見えるはずだよしのぶ」

「そう、ですね」

「上弦の半分は倒された。補充はされるかもしれないけどね…けど
壹、貳、参は必ず来るよ」

「逢魔くん、正直なところ譲りたくない気持ちがあります」

「それは俺も一緒だ。姉さんと夜深の仇だ」

「ふふ、一緒に、お揃いですね」

「ああ、お揃いだね」

寄り添う。

「なら一緒に殺します？」

「あはは、半分こしよっか」

まるで頼む食事が一緒だった時のように笑い合う

多分彼女は、先走らないと思う
俺はどうだろう。多分この約束は自制させるためなものかもしれない

あとは上弦の式に勝てるかどうか

原作における戦闘シーンはしのぶを殺したところだけ

そのシーンがコミックに載る前に俺は転生している

仇に対して情報が少なすぎる

実は『万世極楽教』という新興宗教に関して調べは付いていた

奴が教祖をしている信徒を喰らいこの世の苦しみから解放すると

いう、実にくだらないものだった

その場で、殺してやろうかと思ったが

しのぶとの約束もあるし『宵鷺逢魔』という原作介入を最小限にしたかったのもある

決戦の場まで力を蓄える。必ず滅する為に

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

逢魔が時。

基本夜に鬼はいづる。

影は光が強ければ強いほど起きる

闇が深ければ深いほど影もまた同化する

影の呼吸

日の呼吸から派生する全ての呼吸の中でも異質

「じゃが、夜に強くなるのは鬼だけではないという事を示しているの
じゃ」

映さんはそう語る。宵鷺剣術は夜に戦う事が根幹にある

「ゆえに鬼殺に向いておるとも言えるぞえ」

夜と同化する。

月の光でも影は出来る

奴らは『月』

俺らは討ち滅ぼす『影』である

『無限城』

四方八方上下左右の感覚が狂った館。奴らの根城

決戦。お館様の決死のお覚悟も鬼舞辻無惨を殺すには至らなかつた。

珠世という鬼が鬼舞辻を止めている今。

沈痛な面持ちの『柱』達が『剣士』達が決戦の地を駆けている

俺は自身の日輪刀『影涙』^{かげるい}に手を掛ける。

奇しくも炭治郎くんと同じ『漆黒』へ色変わりをした

だがあの子は『赫灼』のための黒

俺のはまるで夜を塗りたくったような闇の色彩である

ああ、俺の転生した人生の鉄火場になるのは必定。

しのぶとははぐれてしまったけれどきつと目的は一緒だから合流出来るはず

血の臭いが深い。それに知った鬼の臭い

あの真冬の夜を思い出す。

姉と妹を失った夜を思い出す。

姉の宵鷺夜明は自慢の姉だった。村一番の美人だけど俺と夜深を猫可愛がりするのが玉に瑕だった

妹の宵鷺夜深は賢い可愛い自慢の妹だった

俺の後を離れずちゃんと嫁に行けるだろうかと不安だった

その二人が誰かと結婚し幸せにいきただろう未来を奪った鬼の臭

いだった

万感の思いで扉を蹴破る

血臭。むせ返るほどの臭いであつたが意に介さない

蓋にしていた憎悪が蓋を蹴破り顔を出したようだった
しのぶ、ごめんね先に殺してたら

食事。食事をしていた鬼がいる

血を被つたような青年だつた。ニヤニヤと笑つていた

「おや、お客様かなあ？男の子かあ？まあ女の子に比べたら味が落ちるかなあ？」

「久しいな。童磨」

「ん？俺を知っているのかなあ？まあ俺も有名になつたもんだなあ」

ヘラヘラ笑う。喋り方、風体全てが癪に障る

「姉妹を喰いそびれた夜があつただろう上弦の弑。邪魔した男だよ」

「ん、うーんあつたかな？……あー、思い出した美味しそうな姉妹
がいたけど邪魔した子がいたねえ。夜明けが近かつたから諦めたけ
どやけに抵抗されたなあ……それが？」

思い出したようだが首をかしげる

周りには死体。食べ残しが積まれている

「殺しに来た。ただそれだけだ。鬼。害成す者は害されるべし。因果
応報のつけ払わせにきたただけだよ」

影の呼吸・壺の型崩し『影打・夜明の願』

影に消える。

童磨の腕が吹き飛ぶ。が瞬間に再生する

「……………速いねえ」

童磨は対の鋭い扇を構える。奴の周りが冷えてくるようだった

激しい戦闘音。殺意の恩讐。楽しそうに騒ぐ男の声が響きわたる。私はドアを蹴破る。

血を被ったような鬼と逢魔くんが戦っていた
屈託無くニヤニヤと笑いながら対の扇を操り逢魔くんの攻撃をいなしていた

「ありや女の子？まっつてねえまずこの子を食べてから相手してあげるからねえ」

「くっ……」

逢魔くんは血だらけ。彼は弱くない。むしろ柱に引けを取らず柱稽古のときも柱相手に同等の勝負をしていた

上弦の鬼の強さ。参以上は、さらに別格

部屋の中は氷の蓮が咲き乱れ冷えていた。肌寒い

「……………あれが…姉さんの仇」

血を被ったような対の扇を操り戦う鬼

姉を殺した鬼だ。姉ばかりか大好きな人を奪うのか

許さない。許せない。許してなるものか

『幸福』をいとも容易く壊すお前らが許せない

私は『柱』だ

上弦を、殺せばこれから殺させるだろう幾百の人を救える

その前に…逢魔くんを救う

私を殺させないって言いましたね。逢魔くん

私は貴方を殺させないのも一緒なんですよ

蟲の呼吸・蜂牙の舞い【真靡き】

怒濤のつきが童磨の頭を貫く

「凄い突きだなあ。止めれなかった…だけど不憫だなあ突き技じゃ鬼は殺せない」

にたあつと嗤う上弦の式

「頸だよやっぱり頸を斬らなきや」

全身を巡る何かを感じる。頬に微かな痛みを感じる
しばらくしてそれすら感じなくなる

我が専心は奴の絶殺にのみ向けれる

『無我の境地』へ至る

一拍子。それすら置いて刀を抜き振るう

「へ………?」

「え……?」

俺は奴の背後の影に立っていた

「い、いつの間に動いたんだい?」

「……さあな」

奴の頸は飛び身体は瓦解し始める

「俺はみんなを解放していかなきゃいけないんだ。みんなみんな人間は極楽にいけると信じている頭の悪い奴らばかりだから……」

「人間はそんなに弱くない……だから死ね鬼」

眉間を貫きさらに瓦解する上弦の式童磨

こんなくだらな鬼に姉さんと妹は

「地獄へ堕ちろ」

やばい……立ってられない

力が抜け糸の切れた人形のように倒れ込む

「逢魔くん………!!?」

しのぶが駆けてくる。ああ心配そうな顔も可愛いなあ

「貴方、無理をして……処置しますから!!処置しますから!!」

「……………俺は貴女が奴に殺される事を知ってました」

「喋らないで!!」

「一目見て貴女に惚れた。小さくて可憐で可愛くて貴女の全てに見惚れた。あはは、面食いでゴメンね……………まあ貴女の内面にもすぐに惹かれたよ」

「…血が止まりませんから喋らないで……………!!」

泣いてる顔を見て頬を撫でる

「…だから死なせたくない……………知ってた未来を…ねじ曲げてやるんだよって思ってた……………」

「…もう、わたしは……………貴方がいない…未来なんて……………嫌なんです…」

「鬼舞辻との戦いは……………多分続く……………無理はしないで…出来れば……………やめて幸せになつて欲しい」

「…貴方がいなくては幸せじゃ無いんです……………」

意識は霞む

「けど……………胡蝶しのぶは幸せでした……………」

涙で歪む最愛の人を最後に意識は暗転する

『胡蝶しのぶ』は死を乗り越え『宵鷺逢魔』の足掻きは成就される

最期まで最愛の人の体温を感じながら意識は沼に落ちていく

胡蝶より宵鷺の貴方へ【エピローグ】

鬼殺隊をやめてから幾何か

私も少女と呼ぶには相応しくない年齢になってきた

それでも月日は流れていく

私の人生から大切なものが奪われることはそれから無くなり安堵する

此度、継子であつたカナヲが嫁ぐ事になつた

この前アオイを見送つたばかりではあつたが寂しいものではある

鬼殺が必要じゃなくなった世の中になり女の子の子も戦わなくても良くなつたのかもしれない

あの三人娘も年頃の少女となり私の仕事を手伝つてくれていた

柱ではない私は薬学の知識を生かし薬屋をいとなんでいた。剣士時代の蓄えはあるけど隠居するのは性には合わなかつたから人の助けになるようにと始めた事だ

「師範、入つて良いですか」

「もう師範はやめてねカナヲ」

「ならしのぶさん、…失礼します」

「綺麗ねカナヲ」

「あ、ありがとうございます」

照れ隠しに笑うカナヲ。姉さんと一緒に引き取つてからに比べ大分表情が豊かになつた

「銅貨を投げれなきや決められなかつた貴女がねえ」

クスクス笑う

「彼のお陰かしら。まあカナヲ御家族の方とは仲良くね。」

はいと笑いながら涙を流すカナヲ

ああ、皆は幸せをつかんでいつている

鬼舞辻無惨との激闘を勝利に収め鬼は潰えこれからは誕生しないだろう

いつ第二の鬼舞辻が現れるかは分からないから鬼殺隊制度自体は

産屋敷家を中心に残るが今代の剣士達の役割は終えた
立役者の竈門炭治郎達や柱達は生き残り喜んで
彼以外は

姉の墓参りに来ている。命日にはかかしていなかった

「こんにちは姉さん。ついにカナヲが嫁ぎに行きましたよ。ふふっ
拾った時には想像出来なかったね」

「姉さんのいう通りだったわ。恋すれば変わるって…まあ私自身もそ
うだったみたいだけど」

墓石に水を掛ける。姉に話しかける

「姉さん。……彼が目覚めないまま大分立ちました。」

そう、最愛の人の宵鷺逢魔は上弦の弐の戦闘を終えた後重傷で蝶屋
敷に私自身が運びました

決戦を離脱していた事は申し訳無かったが私も必死でした

なんとか一命を取り留めました

けれどいくつ待っても目覚めませんでした

身体的には大丈夫かと思いますが目覚めませんでした

「私はいつまでも待つつもりでした。こんな私を愛してくれたあの人
を……でも」

『……弱気になつては駄目よしのぶ』

「……そう……ね、ありがとう姉さん」

背中を押されている気がした

幾度の季節を巡る。

私は眠る彼の側に居続けた

「逢魔くん、アオイ出産控えてるんですって。男の子か女の子ですか
ね。ふふっ羨ましいですね。私は女の子が欲しいですよ?」

幾度の時は巡る

「カナヲってば料理に挑戦してるらしいですよ。剣士としてはまあ覚
えは良かったけれど女子力にやや不安がありましたからね」

幾度の時は巡る

「カナヲの所三人目ですって。まあ長男が旦那様に似てしつかり者らしいですから大丈夫でしょう」

幾度の時は巡る…

「あれからどれくらい経ちましたかね…あ、今日は綺麗な夜ですよ。窓開けますね…今は逢魔が時なんて時間ですけど。昔はこんな深夜にこうして開けませんでしたね鬼がいて」

「すいません。ちよつと目が覚めちゃいまして…貴方の顔を見に来ました」

「ちよつと、ここにいますね」

もう一方的な声かけには慣れた。むしろしない方が落ち着かないくらい

「…………懐かしい夢を見たんです」

側の椅子に腰をかけて呟く

多少老け込んでしまっている彼の顔を覗き込む

「初めて会った日じゃなくて貴方を助けても目覚めた日…目覚めていきなり手を握られて告白してきましたよね。最初はびっくりしました。助けた男の人に告白されるといのは中々ありませんしね。だから何言ってるんだろうこの人はって邪険にしましたよね」

懐かしむかのように呟く

「けれど貴方はめげずにアプローチしてきましたよね。ふふっだからかな本気なんだなーなんて私もそういつた経験無かったですから。周りも女子ばかりですし鬼殺隊の面々も個性的でしたから私のお眼鏡にかなう男性も中々ね」

「逢魔くん見た目は良かったですし悪くは無いかなーって…それからは私も気になり始めて…いつの間にか私の心に居座っていました」
外を眺めていると蝶が一匹飛んでいた

あれ、夜更かしはいけませんよ？

「…………そんな当時の夢を見たんです」

「だから…その…そろそろ目覚めてくれませんか…？」
「声を聞かせて下さい。貴方の優しい声を聞かせて下さい。抱き締め
て下さい。愛して下さい。」

「胡蝶しのぶはこんなにも貴方を愛しているのです。…もう、こ
んなにおばさんになっちゃいました…だから責任を取ってください」
もうだめだ。感情は決壊する。明日になったらまた頑張りますか
ら。いつも通り笑います。声をかけます

だから今は今だけは許して下さい

「……………」

声を抑え嗚咽する

「……………ゴメン…」

え……………？

「逢魔くん……………？」

「…おはよう……………待たせちゃって…ゴメン……………しのぶだよね
……………」

「は、はい……………しのぶですよ…？」

手が震える。彼が…目を開けている

「…………びつくりするくらい美人さんになってびつくりした……」
「え、いや…………もう、こんなにおばさんになっちゃいましたよ？」
「ううん。美人さんだ…………けれど相変わらず可憐で可愛くて……」
「…………バカバカバカ…………逢魔くんのバカバカ…………いつまで待たせるん
ですか…………女の子の大事な時期に寝過ぐすなんて…………」

「ゴメン…でも待っててくれたんだ」

「当たり前です。…貴方の胡蝶しのぶですよ。」

「……宵鷺しのぶで良いかな？」

「遅すぎます。…不束者ですがよろしくお願いします」

駄目だ涙が止まらないしニヤケも止まらない

責任を取ってください逢魔くん

「……………ただいましのぶ」

線が細く弱り切った貴方はかつての優しい声で言ってくれる。待

ちに待った変わらない声音

「……………お帰りなさい逢魔くん」

泣き笑いで微笑み返す。

これから待たせた時間を取り戻させてくださいね

私の最愛の人

しのぶアフター①

昏睡から目覚めて幾度か経った

弱り切った身体から動けるくらいまでには回復した

『転生者』としては微妙だが一般人としてはそれなりの回復力だとは思う

転生特典とか貰つとけばしのぶを悲しませなくて済んだのかもしれない。

しのぶ救済は転生したあとに誓ったことだった

元々蜜璃さん推しだったなんて口が裂けてもいえない

まあ、『宵鷺逢魔』じゃなかった時の話だから捨て置こう。

いくら寝てたのか分からないから。とりあえず現状把握に何か月か費やした

「…………ちよつとした浦島太郎だなあ」

縁側で茶を啜る。

「何がです？逢魔くん？」

「あ、いや…時の流れはすごいなあ」と

ちかくないっすか？しのぶ…自然に恋人つなぎとか。やばい。

本当美人になった。艶が凄くてエロい（語彙力）

髪も伸びより女性らしい体つきになっている

けど三十過ぎたようには全然見えないし。20代前半に見えるもんよ

大人の色気に少女のあどけなさの融合召喚よ。むしろ色気にあどけなさをチューニングしてさらにオーバーレイしてる（混乱）

身体はおっさんだけど中身はまだ10代なんだよなあ俺は（哀しみ）

耐性はねえんだよ!!

あの頃はしのぶへの恋が猪突猛進していたけど今はどきまぎどする若さって怖え…

「よく来たな…まあ…鬼がない時代か」

それでも小さな女の子には厳しい道のりだ

野生動物が出たらどうする

「喧嘩した」

「誰と?」

「母様と」

「カナヲと?」

俺としのぶは顔を合わせ首を傾げる。

仲が良すぎる家族で喧嘩したとは聞いたことがない

「どうしてや」

「炭汰のことばっか気にするから」

この前生まれればかりの末っ子だ。

なるほど子供らしい嫉妬か

「…そか、まあ迎えが来るまでいるといい。良いよねしのぶ」

「そりや、…いいですけど…」

ありやこつちも拗ねてる。

「……………予行練習と思えばいいんじゃない?」

「なんのです?」

「俺と貴女の子供の」

しのぶの百面相みたいに顔が変わり最終的に恍惚の表情になりニヤける

キャラ崩壊してるよねやっぱり

「やだ、母様来ても帰らない。此処の子になる!!」

さてどうしたものやら

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

家出してきた、それなりに汚れ傷があったためしのぶに風呂に入れて貰い処置してもらおう

俺は……竈門家に文を付けた鎧鴉を送る

多分心配して駆け回っているに違いない。……明後日位には来る

だろう

「…………姉さんは夜深にどう説いてたかなあ…………あの人砂糖飴並にベタ甘々だったから参考にやらねえんだよなあ」

と部屋に戻ると寝息を立て寝ているカナタの姿がある

「寝ちやったか」

「はい、さぞ疲れていたんでしよう」

「そりゃね」

「カナヲと喧嘩ってびっくりしました」

「びっくりって?」

「喧嘩って事は喧嘩って感情同士のぶつかり合いです。…………やっぱり昔のあの子から想像できません。」

「そだな。…………俺は今のカナヲはやっぱり深くは知らないよ。けど…………母親になるって変わらない訳にはいかないんじゃないかな?」

「…………ですかね…………?」

「うちの母親もそうだったよ。…………昔は弱い人だったらしい。自分の意見も通せないくらいだったって。けれど…………俺の記憶では強い人だったよ」

これは転生前の話。『宵鷺』家の母親は早く亡くなっている。今生では父親の『宵鷺黄昏』が男手一つで3人を育ててくれた

「だからいつまでもカナヲは昔のままのカナヲじゃないし喧嘩くらいだっけするだろ」

「そうですね…………やっぱり親にあるというのは凄いことなんですわえ…………なんかカナヲに先を越された気分です」

眠るカナタの頭を撫でながら呟く

「…………名前考えとこうか」

「…………そうですね」

甘く蕩けた少女のようなはにかみ。

『宵鷺』家は夜にちなんだ名前付けられてるんだよね」

俺は逢魔が時からそのまま逢魔。姉さんは夜明け　妹は深夜を振って

「お任せします。男の子でも女の子でも」

「ま、まあ気が早いけど」

「あら生めなくなる年齢まで待たせたら恨みますけど」

ニコニコ

あ、はい善処します

「久しぶりだな。嫁とはうまくいつているのか？」

「あ、はい」

「かたくなるな。派手にいけ派手に」

相変わらずの派手男である

「最近腰が痛くてなあ…歳かなあ。雛鶴」

「昨日もハッスルしていたのによく言いますね」

現役かよ。まあ雛鶴さんも須磨さんもマキヲさんも見た目はまだお若いしね。くノ一ってすげー

「ん…？」

宇髄さんの目に手伝いをしているカナタがうつる

「おー、ついに子供が」

ニヤニヤ笑う

「いやいや目覚めたのついこないだですよ？」

「寝込み襲われたらワンチャン」

「流石にそんなはしたないことしませんよ宇髄さん」

しのぶが薬を用意して雛鶴さんに渡している

「そりや悪かった」

「もう天元様」

雛鶴さんは呆れた顔をしている

「……………何回かしようか思いましたけど」

ボソツと、俺にしか聞こえない小声で言う

えー…

「で、炭治郎んとこの子か何回か見かけた事あるわ」

「来てるんですか？」

「あ、いや…………」

雛鶴さんの言葉に口ごもる

「はあ、家出…ねえ」

「まあ子供ならあることでしょうけれど女の子ですし」

「俺はねえわ。そんなことしたら離反扱いで抜け忍として殺されてたわ」

忍びでしたから殺伐でしたわ。大正怖い

「まあ、竈門くんのところでも喧嘩するのね。超仲良し家族かと思っ
てたわ」

雛鶴さんもびっくりしている

やっぱりそういう認識か

「おはようございます」

カナタはペこりと挨拶する

「おう、やはり炭治郎んとこだわ。躰の良さが伺えるわ」

同じ事、皆考えるなあ

「飴をやろう」

「あ、ありがとうございます」

イケオジだわ

「ま、子供出来た時の予行練習にすればいいさ。うちのはやんちゃ過
ぎる」

宇髄さんちは雛鶴さんが二人、須磨さんが三人、マキヲさんがまさ
かの五人の大所帯だ

子沢山が時代的に多いも嫁さんが三人みればやっぱり別格だ

「ま、頑張りな」

と手を上げて去って行く。雛鶴さんも会釈し付いていく

「……一姫二太郎ですかねえやっぱり」

「うっす」

頑張りまっす

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

昼頃、炭治郎くんの鎧鴉から返事があった

明日、此方へ迎えにくるそうだ

……末っ子の炭汰は身体が弱く発熱を繰り返す事が多い

長男の炭雪は真面目な性格もあり両親の仕事をよく手伝っている

真ん中のカナタは遊び盛りのやんちゃのわがままで母親にべった

りだそうだ

唯一の女の子だし家族を失っている炭治郎くんからしたら目に入れても良いほど可愛くて仕方ないのもあるだろう
それでも母親に甘えたくて仕方ないのだろう

夜の縁側にて歌を口ずさむカナタの姿を見つける

昼間はしのぶにカナヲを重ねていたのかついてまわっていたしのぶも満更ではなさそうだったけれど

「あまり夜に外に出ると鬼が出るぞ」

昔よく父親に言われてた事を言う

「鬼なんていないよ」

「……………そっか。そんな時代か」

「？」

カナタのとなりに座る。よくよく見ると本当カナヲに似ている。首をかしげる姿も。まあ大分表情豊かだけど

「……………カナタ達が生まれる前にはいたんだよ鬼は」

「嘘だあ」

「俺もな、子供の頃はそう思ってたんだよ…けれど鬼はいたんだよ」

「良い子にしても悪い子にしても鬼は来るよ」

「……………脅かしてる？」

ちよつとビビってるな。まあ気の強い子はそれ位でいいだろ

「でも、今は大丈夫だよ炭治郎くんたちが親玉倒してくれたから」

「父様が？流石父様ー」

「でも、外は危ないことではいっぱいさ。人でも悪い奴はいる。

……………守ってくれるのは親だよ一番はね」

「おーまは守ってくれないの？」

「手に届けば守るよ。でも俺もこれから子供が出来れば届けないかもしれない」

「でも母様は炭汰ばかり構うもん」

むくつと頬を膨らませ縁側で足を軽くばたつかせる

「お姉ちゃんだから……………って言われてたんだろ」

「うんよく言われる」

「我慢しなさいとは違うよカナタ。お姉ちゃんは妹や弟を守らな
きや。俺もな姉さんと妹がいたんだけど姉さんは俺らを守ってくれ
たし俺も妹を守らなきやつて思ったよ」

「……」

こつちをまじまじと、見ているカナタ

「……………ま、俺の言いたい事はそれだけだよ。ほら饅頭。しのぶに
は内緒な半分こしよう」

「う、うん」

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

明朝

薬屋を開く時間前から慌ただしい来客があつた

「……………熊？」

「そうらしいのよう……」

近所のよく世間話をする噂話好きのお民さんが形相を変えて入っ
てくる

「……………熊……ねえ。まあそうならお民さん今日は外出控えなさい
な。うちも気を付けるから」

「おまいさんも身体が弱いんだろう？気を付けてーな。しのぶちや
ん、泣かしたらおばちゃんがおまいさんも泣かしたるわ」

そらまた剛気で……

「熊ねえ」

今は春。冬眠から目を覚ました熊が腹を空かしてるか
「……………まさかな」

お民さんが帰った後熊という事に引つ掛かる

確かに熊が人を襲うケースはあるが……大概は鬼だった
鬼舞辻がない今は……可能性は限りなく低い

「…いやいや、まあ鬼舞辻無惨が死ぬ前に昏睡状態になったし実感ないのかもしれない…：…いつまで剣士気分にいるんだか」

鬼は今はいないし童磨は殺した。俺が刀を握る必要はない『宵鷲』の剣位は残したいけれど

「剣術も教える寺子屋か。ふむ…」

検討しよう

「…今日迎えに向かうという事は明日かな？」

「の筈ですね。ま、天候次第ですけど」

しのぶがついでくれたご飯を受け取る

「…熊が出たらしいから気を付けてーなってお民さんが」

「熊…ですか…？うん…？…ここら辺で熊が出たなんてここ何年かは聞いてませんけどね」

「熊…？」

少し不安そうにするカナタの頭を軽く撫でる

「お前の両親は強いから大丈夫だよ」

「べ、別に母様の心配なんて…」

まあ少しやな予感はしていたけれど…

………噛み跡から察して………多分熊じゃない。
人が人を喰ったかのよう

「宵鷺どうしたか？」

考え込む俺に不信に思ったのか声をかけてくるマタギの助さん。
マタギの人達は猟銃を持ち警戒している。

「いや、怖いなあと思いました」

「しのぶちゃんがいるから気が気でないだろう。新婚の旦那まで駆り出してすまんね」

「いえ」

もしも鬼ならば………鬼舞辻無惨の鬼では無いという事になる。

………『影涙』をまたにぎるのか。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

今でも思い出す。姉さんと妹と過ごす。かつて幸せだった時代。

今も幸せだ。だけど彼女達が幸せだったはずの未来はあった筈だ。

哀愁の気持ちは常に『宵鷺逢魔』の底に沈殿する。

仇を討つても払拭はけしてされなかった。

しのぶを救ってはよかった。けれど姉さんと妹は。

「幸せになれば………この気持ちは払拭されるのだろうか」

俺のよく知る二人ならそう言うだろうと思うのは独りよがりじゃないだろうか。

解を出してくれる二人はもういない。ようは俺の気持ち次第だけ
ど。

映さんなら鼻で笑い渴を入れてくるだろうが彼女は病床に伏せ去
年亡くなったという。

………俺はこれ以上失う事にはなりたくない。

此度の犯人はおそらく『転生者』

鬼舞辻無惨がいけない以上鬼はいないはず。

始まりの鬼がいけない今。新たに始まりの鬼が現れた可能性も否めないが『転生者』である俺が至った荒唐無稽で理由もない決。

どちらにしろ『鬼殺』するのみ。

「お、逢魔くん!!」

しのぶが息を切らして部屋に入ってくる。

「どうしたの？息を切らして」

「…か、カナタが見当たらないんです。」

「…散歩とかは控えるよう言いつけた筈なんです」

「留守を頼む。しのぶ…炭治郎くんたちが来たら説明してくれ」

「お、逢魔くん!!? 昏睡状態から覚めてまだ筋力や体力戻ってないんですよ!!? 私が」

「……ただ探してくるだけだよ。しのぶ」

「ならなんで日輪刀を……?」

彼女の視線は竹刀袋に入った『影涙』

「護身用さ」

踵を返し蝶屋敷を出る。

「…逢魔くん…」

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

解『日光克服』

異様に怖かった太陽光が生前と同じ気持ちの良いものになった。

飢餓感はまだ満たされない。最初の若い男性は美味しかった。

老いた肉は不味い。牛豚鳥など食肉と一緒に。鮮度が大事。

後『血液』によって違う。薄い血もあれば濃い血もあった。

……子供肉って美味しいのかなあ？子羊とか子牛とかも美味しかった記憶がある。

私ってばグルメだからね！

……今からちと害獣処理するから待つとけ」

「う、うん」

意識を少女の鬼にむける。濃すぎる。血が。

そこら辺の下弦でもない鬼に比べ威圧感がある

上弦は童磨しか相對した事はないがそれに近い。

食欲に塗れた魑魅魍魎には分不相応。

「貴様……『転生者』か」

「転生者あ？……訳わかんないこと言わないでよ。死んで訳わかんないところにおいて……まあこんなに美味しいものに会えたんだから些細な事だね。東京のものより美味しい!!」

「……」

やはり『転生者』。しかも食欲に溺れ壊れてる。

「同じ『転生者』として引導を渡してやる。それに貴様を始まりの鬼にするわけにはいかない。幸い食い散らしてるおかげか『鬼化』した個体はいないようだ」

まあ無惨のように『鬼化』作用があるか分からないけど。

「とりあえず死ね」

影の呼吸・伍の型『影狂い』

影のように伸びる剣戟。

俺固有の崩しアレンジの剣技は今は使えない。

「……………よくも!!」

速い。伸びた剣は少女の鬼の頬の薄皮を斬るだけに留まる。

四足獣のように深く深く伏せるように構える少女の鬼。

猛禽類のような眼差しは射殺すかのよう。体力がいまはない。長期戦は無理だ。

『影同化の呼吸・常中』

力を抜く。『全集中の呼吸・常中』を解く。

宵鷲の剣は『柔』の剣。影のように揺らぐ。

影は本体の写し鏡。映さんはそれを体現していた。

『影同化の呼吸・常中』は擬似的に『無想』に至る。

無我とは対極の極致。

『無想』無心になる。

仏教における無念無想の意になる。剣術とは刹那の術理。

外なる『無想』。内なる『無我』。

俺なりの解釈による俺なりの境地。

沸沸とした怒りに蓋をする。荒波のような激情は風のように静寂を取り戻す。

激情は過剰に力を込め術理を鈍らせる。

あらゆる影を知覚する。

無我の境地は忘我とは違う。我を無くして自己を拡張する。

無想とは無心になり世界と一体化する。

俺なりの決。対極の境地ながら至る領域は一緒。

この転生者の鬼は恐らく上弦レベルのポテンシャルを有している。

そして始まりの鬼たり得るのだ。

ようやく終結した幾百年の鬼との戦い。

再び『鬼』が生まれたならばどれだけの血と涙が流れるかどうか。

人という種として断じて認めるわけにはいかない。

討ち滅ぼすのみ。

少女の鬼は獣が如き膂力を持って跳躍する。

人ではこの鬼の膂力には敵わないの自明の理。

『転生者』としても平々凡々だ。所謂『転生特典』^{キブト}を持たぬ我が身。だがだからこそ至れる境地も在るだろう。

意識は拡張される。この刹那で決まる。弱り切った身体では限界は近い。

右手をゆらりと構える。

影の呼吸・始の型『影生まれ・東雲の誓い』

襲いかかる少女の鬼の頸の『影』を知覚する。止まって見える鬼に
這い寄る影のように斬り捨てる。

鎮っ…!!

「はへ…?」

少女の鬼の頸は真っ二つにはなり地面に落ちる

「ひう…」

「……………せめての情けだ。安らかに眠れ」

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

闇のような髪に影のある瞳。多少痩せ細る男性だった。
私を殺しに来てくれたのだろうか。

自制の効かない衝動。飢餓感。

自分が自分でなくなるような欲の衝動。

喰らえと叫ぶ。頭の中にガンガン叫ぶ。増やせと叫ぶ。

ああもう五月蠅いなあ…!!

どうしようもない欲の衝動が襲う。我慢強い方ではなかったけれど
ども仮に強くても耐えられない程の欲望の嵐。

いくら食べても収まらない。むしろ一線を越えてしまってから堰
を切ったかのようにより強くなった。

殺してよ。

殺してよ。

殺してよ。

衝動のまま目の前の男へ襲いかかる。

獣が如き膂力で咆哮を上げながら襲いかかる。もはや人間の振る
舞いなどかなくなり捨てて。

餓鬼さながらと男は言う。本当まさにそう。

だから殺してよ。

影の呼吸・始の型『影生まれ・東雲の誓い』

そう男が真っ黒な夜のような刀を振るうと私の視界はぐるぐると回った。

ぽとんとはねた後地面が見えた。

首が刎ねられたのだ。

それと同時に静かになった。騒がしかった暴風も水面のような静寂を取り戻す。

ああ、静かに…なった

「……………ありがとう……………それとごめんなさい……………」
私の身体は塵となり私の意識は霧散する。

どうか……………せめて、静かな所に。

しのぶアフター【幸せの願い】

かつての夢を見る。

幸せだった夢を見る。

父親の宵鷺黄昏が亡くなってから道場は畳み三人の姉弟妹は三人で静かに暮らしていた。

「おうくん、やみちゃんご飯だよ」

夜明姉さんは穏やかな人だったがどこか抜けている人だった。

そろそろ俺達は俺達で何とかやるから嫁いで欲しかったが。

「や。」

の一言で頑なに拒否られる。この村一番の美人であると俺と夜深は思っていた。実際引く手数多だと思う。

鍛冶屋の湯助さんあたりまだ諦めてないし。

八百屋の次郎なんか撃沈ついに百回目だ。

弟の俺からしても綺麗な闇色の艶のある長髪に女性らしい身体付きでモテるように思える。

「行き遅れになってしまっても知らんよ俺は」

と悪態をつく。

「おうくんに貰って貰うから大丈夫。」

「……………お姉ちゃん表出ようか久しぶりに切れちゃったよ……………」

「やめろやめろ勝てない上に身体弱いだろお前。何にキレてんだ何に」

頑なに俺の隣のポジションから離れないのは末っ子の夜深。

身体が弱く外出はろくにしない。まあ命に関わる持病でもないが致命的に体力がなかった。

基本的には内気で家族以外とは会話もままならない。

線が細く目付きが悪いが一括りにした闇色の髪がはねて愛嬌はある。……………と思う。

「あらあら、やみちゃんってばやきもち?」

ニコニコと笑いながら言う。姉さんからしたら他意のない言葉。けれども夜深からしたら地雷も地雷。火に油。地雷原に核を落とすようなもの。

「…………お姉ちゃん…ふふっ……………久しぶりに姉妹水入らずお風呂入ろっか……………」

「あらいいわね。」

ニコニコー

「何をするつもりだ。お前は。」

夜深に軽くチョップする。恨めしげに此方をみるがスルー。どうか接触し過ぎだ夜深。年頃の女子が身体を密着し過ぎな。線が細いけど当たるもんは当たる。

変わらない宵鷺家の風景。

暖かくいつまでも続くと思っていたその風景はいつも容易く崩れ去った。血を被ったかのような鬼の戯れのような襲撃。

宵鷺逢魔は『転生者』だ。

それでも臆気でまだらな前世の記憶と知識があるだけで特別な何かがあったわけでも無い。

前世の記憶の中でより深く残っていたのは『寂しさ』だけだった。

まだらな前世の記憶にはいつも線香の匂いがあった。

いつも一人だった。

隣には誰もなく近づく人は悉く居なくなる。

思い出したくないのだろうか。前世がどういった世界でこの世界は漫画の世界でという知識はあるが前世の自分の履歴だけがぽっかり抜け落ちている。

けれどもこの寂しさだけは紛れもない自分自身だった。

だから俺はこんなにも失う事が怖いのだ。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

少女の鬼との戦闘後カナタを連れ蝶屋敷に帰宅する。

カナヲ夫婦が既に来ておりカナタを深く抱き締めておんおんカナ

夜も深くなっている。

「逢魔くん？」

「は、はい？」

夫婦の寝室。蝋燭の光だけが照らしている。

「お疲れ様です。今日は色々ありましたね。」

しのぶは隣に座ってくる。肩に感じるしのぶの体温。

すぐに密着したがるのは妹と同じだなあと考える。

「しのぶこそお疲れ様。ごめんね色々心配かけて……」

「……やっぱり鬼……だったんですか？」

「……」

「微かに鬼の気配が逢魔くんに残ってました。………鬼がいるなら

また……」

「………あれは鬼舞辻の呪いが外れた鬼だった。禰豆子さんのように日光を克服をした鬼だったよ」

半分は嘘。転生者であることは言えないしのぶからしたら荒唐無稽だ。

息を飲むしのぶ。

「でも、……倒したよ……多分あれが最後の生き残り。あんなレアケースがいたら大変だよ。多分。」

「………それはよかった……ですけど私が怒っているのは別ですよ？」

逢魔くん？」

はい、存じております。笑顔で怒っているときはマジギレしてるときだ。……更に怒ってるときは絶対零度の冷たい表情の時です。あの時は被虐の性癖に目覚めそうになりました。

「………貴方は昏睡から目覚めてからまだ半年しか経ってません。」

駄目だ。その顔はさせるつもりはなかった。だからやめてくれ。

泣きそうで悲しい顔は……させるつもりはなかった。だから

「……ごめん。……」

「私は貴方を失いたくありません。貴方無しでは生きられません。そうしたのは貴方ですよ？逢魔くん。………無理や無茶はしないで下さい。」

真っ直ぐは見られない。弱くなった？俺は。違う。……………立場が逆転しているのだ。こんなにもしのぶは俺を愛してくれている。

他の全てをかなぐり捨ててでも愛してくれている。かつての俺のように。

だから。

「俺は…………俺も失うのが怖いんだ。どうしようもない理不尽がいつも奪っていく。」

「……………貴女を失ってしまうのが怖い」

失ってしまう怖さ。それは常に付きまとう。

「……………当たり前です。私達は人間なんですから。」

彼女のしなやかな手が俺の頬を撫でる。

「……………死が二人を別つまで」

「いやだ…死すら。いやだ。」

「我が儘ですね。あの時の貴方はもつと真っ直ぐでしたよ…んう…んん…」

んちゅつと舌を入れてくるような情熱的な口づけで唇を奪われる。

「んんんっ!!!」

しのぶの突然のキスに目を見開く。舌を絡められ彼女の味がする。

脳に直接刺激する甘美な衝撃。

「んはあ…な、なにを!!?!しのぶ!!?!」

即墮ちしてしまう衝動に思わず一度離れる。

「貴方の強さに私は救われました。……………だから貴方の弱さも下さい。私という存在をより深く刻ませて下さい逢魔くん……………」

彼女の真剣な眼差しで此方を見てくる。彼女もいっばいいいっばいで顔は真っ赤だ。

「しのぶは貴方に添い遂げると誓いました。貴方も誓ってくれましたね。……………」

ああ。誓った。けれどもごめ寂しさはどうしようもないんだ。

宵鷺逢魔の弱さじゃなく【×××】の弱さだから。

×

宇髓さんがニヤニヤしており他の宇髓嫁ズやら寵門夫婦などが気まずそうにしていた。

いやその………いたこと思い出したの賢者モードの時で二人して悶絶して寝れませんでしたよ!!?皆爆睡して気付かない事にこれでもかかってくらい祈りましたけど宇髓さんの表情で「あ、察し……」みたいになったわ!!

「……もうお嫁に行けない……」

としのぶは顔を真っ赤にして俯く。いやいやもう俺の嫁だからね!!?

子供達は爆睡しており気付いてないですよと雛鶴さんがフオロロしてくれる。

「…第一子期待してるぜ?」

宇髓さんはニヤニヤしながらお茶を飲みからかってくる。

「…ははは」

はあ。駄目だ。顔面から火が出るくらい恥ずかしすぎる。

「おーま。」

カナタが近付いてくる。ちよつと待って。

「どうした?」

軽く咳払いしてイヤに真面目な顔をしているカナタにつられて此方も姿勢を直す。

「きのうは、助けてくれてありがとう…なの。めいわくかけた…ごめんなさい。」

ペこりと礼を言い謝るカナタ。

「………そだな。カナヲたちに心配かけたしな。まあどちらにしろ無事でよかった。………カナヲに愛されてるって分かっただろう?もう8歳なんだ。お姉ちゃんらしくな。」

カナタの頭を撫でる。

宵鷺道場。

「此処ですか？」

隣のしのぶは聞いてくる。そうだよと返事を返す。もう放置されて大分経っており廃屋と化していた。

【童磨】の襲撃からそのままのよう。

「……………大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。しのぶもいるし。気持ちの整理はついてるさ」

道場の裏手に彼女らを埋めた簡易的なお墓があった。

「ただいま姉さん。夜深。…全部終わってから来るつもりだったけど遅くなっちゃったわごめん」

「初めましてしのぶと申します。…………挨拶が遅くなりましたけど逢魔くんのお嫁さんやっています」

「逢魔くん、全部自分で背負っちゃうとこがあつて大変です。…………でも幸せにやっていますから安心して下さい。」

としのぶは手を合わせる。俺も手を合わせる。

俺は幸せになって良いのだろうか。と未だに死んでしまった二人を前に何処かそう思ってしまう。

『馬鹿ね、…………私達はいつもおうくんの幸せしか願ってないよ？むしろ幸せにならなかつたら呪うわよ』

『幸せになっちゃえ、馬鹿兄貴…』

…そうだな、ごめん。俺の都合の良い幻覚だったとしても俺は此処で区切りを付けなくちゃいけない。

しのぶを幸せにするために。

ありがとう夜明姉さん。夜深。安心して休んでくれ。

俺は幸せだから。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

冬が終わり再び春が来た。

俺は道場兼寺子屋を開く事にした。

蝶屋敷の近くに使ってない建物があつた。持ち主の人は高齢で管理が難しく管理を条件に使用許可を頂いた。

宵鷲剣術を教える道場兼寺子屋を開いた。

転生者前と後に培ったことを生かしつつ生活をしていく。

しのぶは身重だ。無理はさせられない。

薬屋もやりつつ寺子屋もしていこうと思う。

生徒第一号はカナタだった。宵鷲の剣に興味を持ったらしい。女の子に剣はと言っていたが元々剣士だったカナタにやると効かないカナタを止める言葉は出てこなかったらしい。

カナタは思っていた以上に打ち込んでいた。

長続きするかなあなんて思っていたが基礎の体力作りにも根を上げず付いてきている。

徐々に門下生や生徒が増え忙しくなってきた。

やりがいがあり楽しくなってきた。

賑やかな毎日は寂しさを感じさせず矢のように進んでいく。

「せんせ、もう少しだって。」

胴着姿のカナタがひよっこり顔を出す。

「そっか。ありがとう。カナタ。」

自室で書き物をしていた俺にカナタが声をかけてくる。

「そわそわしてるよせんせ。」

カナタは俺をせんせと呼ぶ。まだ慣れずむず痒い。

「仕方ないだろう。初の子どもだ。…立ち会うって言ったのにしのぶはやですと拒否されたんだよ」

「しのぶ様乙女だから恥ずかしいんだよー」

「乙女心とは難解だ」

廊下を進み出産を行っている部屋に行くと言ったの聞こえた。え、きた!!?

「は、入って良いか」

どうぞという言葉と共に部屋に入ると出産を終え横になるしのぶと赤ん坊がいた。

「…女の子…ですよ。逢魔くん…」

疲れ切った顔で微笑むしのぶ。

「ああ、お疲れ様…しのぶ…抱きかかえて良いか？」

「どうぞ」

近くにいたカナヲの手を借り我が子を抱きかかえる。命の鼓動を感じる。

不確かだった実感が確かなものになる。

「…俺と貴女の子か…」

「ふふ、そうですよ……」

「名前……決めたんだけどいいかな？」

「そういえば決めるって言ってましたね……」

「女の子ならちようどよかった。貴女の名前から貰って夜の関連の名前で『東雲』でどうかな？」

夜明前の茜色に染まる空の意。

これからのこの子の人生がより明るいものになるように。

「素敵な名前です…よろしく東雲。」

「宜しうな。東雲。」

これからもいろいろなことがあるのかもしれない。

三人で乗り越えて行こう。

俺はもう寂しさを感じる事などないのだから。

『胡蝶の君へ』了